国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

◎特　集　SSEAYP International 第8回総会
●レポート　ラオスに小学校を建てよう

マクロコズム '95.11

vol. 7

㈶青少年国際交流推進センター

▲ 青少年スポーツ省大臣の出席を得て盛大に取り行われた開会式

▲ 8月31日は、マレイシア建国38周年の記念日SIGA参加者も招待された盛大な記念式典のパレード

▲ 各国会長会議を終了して和やかな雰囲気の代表者たち

▼ 総会議事録や各国から出てくる資料の作成にフル回転している事務局

特集 8th SIGA in Malaysia

SSEAYP International とは、アセアン6か国の「東南アジア青年の船」既参加者組織と日本のIYEOによる国際連携組織であり、SIGAとは、各国が毎年持ち回りで開催している総会の略称です。1988年にマレイシアで第1回が行われ、2順目となります。

今回の大会決議には、改めて「社会貢献活動の促進」「組織の充実」をかかげるとともに、ベトナムのアセアン加盟に伴う「東南アジア青年の船」事業の新たなる展開について多くの意見が出されました。また、SSEAYP International 事務局がタイから日本に移行し、新事務局長にIYEO副会長の早川理恵子さんが選出されました。

▲ 開会式入場を前に、旗手を努める各国若手代表者
勢ぞろい

▲ 開会式の後、各国の愛唱歌を一曲ずつ披露
合唱のリードをする日本の野田君とフィリピンのボン君

(SSEAYPインターナショナル第8回総会)

1995. 8. 31. ～ 9. 4. (クアラルンプール)

◀ SSEAYPインターナショナルの活動の方向性についてレクチャーするシンガポールのタン会長

▼ 大会決議にサインをするIYEO森田副会長と
シアップ・インターナショナル事務局長タイのノパドン氏

◀ 外務大臣主催フェアウェルパーティーにて
前列左より、SI 新事務局長の早川さん、在マレイシア日本大使館塩口公使、マレイシア外務大臣 Mr.Hon. Datuk Abdulliah bin Haji Ahmad Badawi, マレイシア既参加者組織会長アウジ氏、青少年スポーツ省ディレクター、SSEAYP 第 1 回参加者の一人、斉藤三等書記官
後列、日本代表団メンバー

See you again in Philippines !

―― 来年はフィリピンです。

〈こんな活動もしてきました〉

▲ 会場となった Institute Aminuddin Baki で記念植樹

―― 孤児院への訪問 ――

各国からおもちゃや寄付金を持ち寄って贈りました。今後、マレイシアの既参加者組織である KABESA は、この孤児院への協力活動を継続するとのことです。

◀ 植樹を終えて陽気に騒ぐメンバー

―記念植樹―

▲ 各国代表に記念品を渡す青年スポーツ省大臣（右）左はIYEO副会長 森田正英氏

アジアの伝統と西洋の価値観

SSEAYP International 第8回総会開会式 タン・スリ・ムヒディン・ヤッシン青年スポーツ省大臣閣下の演説から（抜粋）

（1995年9月1日午前11時
マレーシア、パハン州ゲンティン・ハイランド、
セリ・ラヤン、IABにて）

東南アジア青年の船事業の初期の頃の主眼は、東南アジアの青年たちを集め、自分たちの未来の運命は、一致協力して働いて、ヨーロッパやアメリカの旧宗主国への依存の鎖を永遠に断ち切る能力にかかっているということを理解させることにありました。ここ20年間における私たちの業績は誇るに足るものではありますが、同時に、旧宗主国が、私たちの完全性を認めずに挑戦し続けていることを忘れてはなりません。

21世紀が目前に迫っている今、これからの発展を担う青年たち若い世代が、この挑戦を最も強く受けています。私たちは今日、科学・技術の発展によって急速に変化する世界に生きており、「ボーダーレス世界」に入りつつあります。国境の無い情報やメディアが支配的な世界において、青年たちは、私たちの祖先が大切に育て、誇りにしてきた伝統的なアジアの価値観が徐々に蝕まれる危険にさらされています。この新しい現象は、放置すると、私たちの強さと共同体の団結の源であるアイデンティティを失わせることになるかも知れません。青年たちは、暴力、別居、離婚その他不健全で好ましくないことを唱導するテレビ番組や映画や音楽に、日々攻めたてられています。

老人を介護するという伝統的な家族の価値は、都市的生活様式が普及するにつれて顧みられなくなりました。年長者及び共同体の責務に敬意を払う伝統は、個人の権利を最高の価値として強調する別の価値観におびやかされています。人権と環境は、いわゆる新しい価値観をアジア社会に受け入れさせるために使われる新しい武器となっています。これ

主な内容

アジアの伝統と西洋の価値観 …… 5〜6
21世紀は、交流、知恵、芸術の時代……7〜10
（東京大学名誉教授 木村正三郎氏講演）
日本語を忘れた8日間（韓国にて）……11〜12
Up with Peopleに参加して……12〜13
岡山青年国際交流会……14〜15
高知ラオス会……16〜17
事後活動アンケート調査結果より ……18
人物紹介コーナー ……19
各地の交流活動 ……21〜22

〈表紙の説明〉
シンガポール6才の
リャン・フィ・ウエイさんの
「私の夢」
アジアのこども絵画展より
入賞作品

まで長い間安定していたアジアの慣習が、新しい西洋の価値に取って代わられる危機に瀕しており、その最も大きいインパクトを青年が受けています。

青年たちを西洋のメディアから完全に遮断することができないのは明らかです。しかし、私たちの伝統的な価値の美点を青年たちに広めることによって、この影響を打ち消すことは可能です。

今こそ、私たちの良い価値観を保持し、それと同時に、知識に富み、技術に優れ、強い精神を持ち、教養あるアジアの青年を育成するような事業について、さらなる行動を考える時だと思います。バランス感覚と自信を持ち、アジアの文化のアイデンティティを失なわずに、これからの課題を克服できる青年指導者を育成するための方策が求められています。これは、あなたがた東南アジア青年の船同窓会のみなさんが取り組まなくてはならない課題です。

「環境は、子孫からの預かり物」という見出しは、「地球の日」が始められた時に世界中にこだましました。もっと多くのことが、まだ達成され得ると思います。青年や一般の人々の関心や情熱を呼び起こすため、私たちは、新鮮で、気持ちを高揚させ、次から次へと広がっていくような、持続可能な発展のためのアプローチを採用しなくてはなりません。それは、西洋の環境保護論者が私たちに行わせたがっている偏頗な保護主義ではなく、私たち全員が当然に享受すべき経済発展を達成しながら、同時に、私たちの環境を損なわないよう保証することです。これから先何年か、西洋の環境保護論者が、私たちの地域を、世界を救い地球を緑化するために是非そうしたいと考えるような型にはめようと、青年たちに影響を及ぼすべく多くの試みがなされるだろうということに、青年たちは注意を払わなければばなりません。

環境への関心は、青年たち、特に明日の指導者となる青年に繰り返し教え込むべきです。環境意識を高め、環境教育を行うことは、私たちの価値体系の中に組み込まれるべきです。各個人やコミュニティが、使用済み資源の再利用や町の清掃や美化といった環境にやさしい活動をすることによって、効果的で建設的な役割を果たすことが、私たちの社会的責任の核心をなしています。その結果、すばらしい指導性が育ち、青年が、強い自信を持ち、新しい考えや躍進を生み出し、技術を革新し、ボランティア精神を持ち、環境を倫理にかなったやりかたで管理することでしょう。

青年が直面しているこれらの重大な課題に取り組むに際して、皆さんは国際的な同窓会組織ですから、単独で活動するのではなく、青少年育成に関係する政府や民間の他の国際機関と連携して活動していってください。

最後に、1995年コペンハーゲン青年宣言から「わたしたちが思い描くのは、経済的不公正がなく、社会的にも個人的にも極端な欠乏がない世界です。全ての人々がお互いに尊敬し、協力しあい、寛容さを持ち、平和と正義の下に生きる世界です。」という言葉を引用して、SSEAYP International 第8回総会の開会を宣言します。

21世紀は、交流、知恵、芸術の時代（講演）

東京大学名誉教授
木　村　尚三郎

21世紀は旅の時代

21世紀という時代は、一番メインの産業が旅産業であると言われています。世界の総所得の一割、総労働人口の一割が、旅行産業に従事するということでして、世界大移動時代が今始まりつつあります。旅をするときは、歩くのがいいと思います。旅先では、ぜひ、歩いていただきたい。歩きますと、その土地なりのおいしい食事とか、その土地なりのいい建物、お寺とかお城とか、その土地なりのいい衣装、衣服であるとか、あるいは、その土地なりの音楽とか、祭りとか、民族芸能とか、工芸品とか、土地なりのいい生き方に接するはずです。この土地なりのローカルな暮らしと命の知恵、これを文化と申します。

全世界どこにでも共通するいい生き方、例えばジェット機に乗るとか、車に乗るとか、テレビを見るとか、抗生物質の恩恵を受けるとか、全世界共通のいい生き方を、文明と言う言葉で呼びます。

20世紀は明らかに技術文明の時代でした。しかし、今、少なくとも先進諸国においては、この技術文明が成熟してしまって、全身が喜ぶ大きな技術の展開が実感されない。そういう状況の中で、技術文明の進歩発展に驚きと喜びと幸せを見いだす時代から、それぞれの土地ごとのいい生き方、土地ごとの文化に新しい驚きと喜びと幸せを見いだす生き方に、今変わりつつある。そのためには全世界を動かなければならない。21世紀はその意味で「旅の時代」であると、私は思っております。

大きな乗合舟が欲しい

最近、パリの西北に、ラ・デファンスという未来型の都市ができました。そこに、巨大な長方形のビルが建っております。これを「グランド・アルシュ」と設計者のスプレッケルセンは名付けました。アルシュは聖書の創世記に出てまいります「ノアの方舟」です。あのような、大きな洪水が、また来るかもしれない、全世界的に今、足踏み状態で先が見えなくなってきております。言ってみれば、成功しない時代に入りつつあります。その中で、国家とか民族とか人種を越えて、皆が共に乗り合う大きな乗合舟が欲しい、これが現代だろうと思います。

地域ごとの大きな乗合舟の一つがEUでして、15の国がお互い兄弟国の関係に達しつつあります。これまで、ドイツの歴史家も、フランスの歴史家も、外国と共同で教科書を作るということは

考えなかったけれども、1992年に高校生用の共通の歴史の教科書が生まれました。かつて戦った国と国との間でも、お互いに共通の教科書を作る、共通の乗合船を作ることが求められている。一国だけでは、あるいは一個人だけでは、未来が開けないという状況の中に私たちが置かれているからです。先のはっきり見えない時代というのは、お互いに「ちょっといやだな」と内心思っている人との間でも、手をとり合う、友達になり合う、そのような関係が必要になってくるということです。

仲良くなる秘訣

かつて、1814年の9月から1815年の6月にかけて、ウィーンのシェンブルーン宮殿で、ウィーン会議が開かれました。ナポレオンがあちこちに戦争をしかけて、ヨーロッパの政治秩序を乱してしまったので、それを修復するために開かれたものです。ヨーロッパ各国から212人の人が集まってまいりました。ところが、昨日まで戦い合ってきた仲ですから、会議がうまく進まない。会議をやってもやっても、途中で中断される。そうしますと、すぐに、舞踏会にしましょうとか、お昼ご飯にしましょうとか、狩りはどうでしょうか、あるいは、園遊会をしましょうとか、会議は中断したまま、そういう楽しい催しが、繰り返し繰り返し行われました。これを「会議は踊る、されど会議は進まず。」と言いました。

では、このウィーン会議は失敗であったかというと、そんなことはありません。確かに会議は中断に次ぐ中断だったんですけれども、一緒に食べたり、飲んだり、踊ったりしているうちに、だんだん気持ちが変わってくるわけです。自分の目の前にいる人間は敵の国の代表なんだけど、この人間自身はいいやつだと、お互いそう思うようになる。そうすると、自分の国としてはこれだけ領土が欲しいけれども、相手には相手の事情があるなと、あるべきヨーロッパの共通の秩序がそこで見えてまいります。このウィーン会議からあと、1914年の第1次世界大戦の勃発まで、ちょうど百年間、ヨーロッパには平和が続きました。まさにこれは、ウィーン会議のお陰です。

単に握手して、「さあ、仲良くしよう。」と言っても、仲良くなれないので、ちょっと理性を後ろに下げて、できたら、ちょっとお酒も入れて、一緒に食事をする、一緒に踊る、あるいは一緒に歌う。そうすると、お互いちょっとこわいなとか、気持ち悪いなとか思っていても「まあ、いいか。」となります。これこそ、お互い仲良くなる秘訣ではないかと思います。

■ 互いに手を洗う

ヨーロッパでは、15世紀までは、スプーンもフォークもありませんでした。つまり手で食事をしていた。手が汚れていると食事ができません。どうしたかというと、食事の始まる前に、男、女、男、女と並びまして、その男と女の間にフィンガーボールを置いて、お互いに隣の人の手を洗った。まずお互の手を洗い合って、そして、知らない人同士も仲良くなりました。このように、理屈ではない、肌と肌との触れ合いでもって、お互い仲良くなるわけです。

■ 江戸の花見

18世紀の江戸で花見とか花火が盛んになりました。江戸に集まって来たのは日本各地の人で、お互いによそ者同志です。言葉もかなり違う。その人たちが、ファッション感覚のある舞台装置の下で、お互い酒を飲み合い、仲良くなったわけです。今、日本の各地で、村祭りとか盆踊りが非常に盛んですが、この村祭りとか盆踊りの直接の起源も、18世紀です。一緒に太鼓を叩いたり、お酒を飲んだり、踊りを踊ったりしますと、お互い「ま、いいか」となるわけです。知らない人、ちょっと苦手だと思う人とも、仲良くなり合う知恵というものを発揮してきたわけです。

■ 互いに声を出し合う

カラオケが全世界に流行っています。カラオケというのは、野原で一人で歌っていても意味がないのでありまして、聞いてくれる人がいて初めて、カラオケの意味があります。つまり、声を通して、お互い心を結び合いたいという気持ちがあります。昔は、例えば、お経を読むとか、御詠歌を歌うとか、田植え歌とか、よいとまけの労働歌とか、声を合わせて、そして一緒に労働をする機会がたくさんありました。ところが、戦後、機械化が進み、お互いに声を出さないで、例えば、黙ってコインを入れて切符を買う、そういうことを一般的、日常的にするようになりました。高度成長期にはそれでも良かったんですけれども、今のように、成長しない時代になりますと、みんな寂しいわけです。それで、みんな声を出したいんですね。その一つがカラオケだろうと思います。声を出して、声を合わせると、自然に心が合うわけです。お互いに声を出し合うことによって、違った国の人とも仲良くなれます。これは非常に大事なポイントではないかと思います。

コミュニケーションの時代

18世紀の初めに山本常朝という人が口述筆記させた「葉隠」という本は、武士道の書、殺し合いの教科書のように思われていますが、そんなものではないのです。例えば、こういう叙述があります。「朝起きる。寝起きが悪くて顔が白い、あるいは、二日酔いで顔が白い。そういう時は、武士たるもの、頬紅を用いよ。」つまり、顔の白いまま出て行くと、相手に対する印象が悪くて、それこそ、切り合いになるかもしれない、それはつまらないことだからお化粧せよ、武士たるもの手鏡と頬紅の粉を持って歩け、と書いています。

先の見えないとき、一人では生きられないとき、そういうときに、このようなコミュニケーション感覚が働くんですね。

今、アメリカで、流行っているホテルがあります。ビジネスマンが全世界飛び回って一番困るのは、夜の食事です。ホテルのレストランなどで、みんなが楽しそうに、恋人同志、家族同志、友達同志で食事をしているのに、自分一人だけ、ボソ

ボソ食べなきゃならない。その時、ホテルの副支配人がソロリと出てきて、「もし、お客様、よろしければ、私がお相手させていただきますが、いかがでしょうか。」これが、今大受けにうけているということです。一人で、ゴーイングマイウェイで未来を開いていくという力強い時代は、ちょっと後退しました。その分、お互い仲良くなる。これが基本の時代がやってきました。21世紀という時代は、まさにコミュニケーションの時代です。全世界に人が動いて、その土地なりの暮らしと命の知恵を楽しみながらお互いに仲良くなりあう。これが、求められています。まさに交流の時代です。

合理性から感性へ

茶室は、狭いにじり口から入ると、中は非常に狭い、薄暗い空間です。あまり、目は働きません。その代わり、お湯のシュンシュンいういい音が聞こえてきます。お茶のいい香りも感じられる。もちろん、お茶のいい味もあります。お茶碗のいい手触りもあります。お茶の廻し飲みをしますと、自然に感性が働いて、理性の方は働かないが、心が開かれて、お互いに友達になり合う、心の友ができるわけです。これが、16世紀にお茶の創始者千利休が追求した世界です。つまり、身分の上下を越えて、金持ちと貧乏人の差を越えて、お互いに平等な人間関係をつくりだす。16世紀、17世紀と、乱世に、互いに戦い合う中で、しかし、友だちを求めたんですね。武士も町人もその他の人々も、平等な人間関係を求めた、その表れでした。私どもが今求めているのは、まさにこの千利休の世界です。

ヨーロッパの教会も狭い入口から入り、中は薄暗い空間でして、あまり目は働きません。しかし、蝋燭のいい光がそこにあり、お香のいい香りがあり、鐘のいい音があり、賛美歌のいい声があって、感性的に非常に豊かな空間です。そのような空間にじっと身を置いていますと、自然に心が落ちついて、神様と自分とか、そこにお参りしている人々同志の間に、一種の心のつながりができてまいります。そこで音楽会もやりますし、絵の展覧会もやりますし、さまざまな集会に使われます。時には野戦病院になるわけです。お互いに人と人とが集う場、魂の避難所という意味では、まさにグランド・アルシュ、大きな乗合船と全く同じ働きをしていると言っていいと思います。

そのような感性空間というものを、今まで私どもは、どちらかというと、バカにしてきたのではないかと思います。人間たるもの理性的に生きる、合理的に生きる、そして未来を力強く開いていく。自分は自分で生きていく。邪魔する人間がいれば、戦争も辞さないというのが20世紀の生き方でした。未来が明るく輝き、皆がまっしぐらに未来を見つめて駆け上がって行った。合理性が何よりも重視されました。感情などは自分の心の中に押し殺してしまう。こういう生き方をしてきました。でも、21世紀はそういう時代ではないはずです。お互いに心と心を結び合って、友だちになりあって、その中から共に知恵を発揮する、これが求められる時代のはずです。

（以下次号に続く）

（これは、'95年7月17日の国際青年交流会議での講演内容をまとめたもので、2回に渡って連載します。）

日本語を忘れた8日間

安　達　真理子
（第2回世界青年の船参加青年）

この8月15日から22日まで韓国ソウル、慶州で開催された第6回インターナショナルユースフォーラムに参加しました。これは、韓国青少年団体協議会主催、韓国文化スポーツ省後援によるもので、1990年に始まり、毎年開催されています。

今年は、国際連合設立50周年、国際青年年10周年、韓国青少年団体協議会発足30周年という記念すべき年で、30数か国の青年150名が集まり、"Globalization of Youth and Youth Organizations towards the 21st Century"というテーマで行われました。ちなみに日本からの参加青年は8名でした。

▲ ソウル教育文化センターにて（筆者、左から2番目）
インフォメーションデスクでスタッフとともに

〔主な内容〕

1　講義と議論

各国から青年問題および国際問題分野の専門講師が以下のようなテーマで話題を提供し、講義後、各グループごとに討論会。

- 青年と国際社会の傾向
- 青年間の国際理解と協調
- 現世代の将来雇用問題
- 青年の社会参加と権利
- 国際平和における寛容：国際社会における青年の役割
- 青年と国際技術：理解と未来への役割分担

2　各国の文化紹介

全体討議が行われるホールに各国の紹介コーナーを設置。日本は、日本地図、絵はがき、書道、折り紙、観光パンフレット、ポスター等を展示

3　韓国文化の夕べ・国際文化交流の夕べ

韓国および各国・地域の青年達による舞踊、歌、劇などの披露。日本は、私が日本舞踊「さくら　さくら」を踊り、全員で盆踊り（炭鉱節）を披露した。

4　スポーツ活動

会場隣接のプールで水泳

5　現地視察・研修旅行

韓国民俗村、慶州、ソウル市内視察及び現代自動車、三星電子の各工場見学

6　宣言文の起草

各グループで討論されたことに基づき宣言文を起草

私自身、初めて外国主催の国際交流プログラムに参加し、いわゆる「外国参加青年」という立場を経験しました。参加青年やスタッフの人達はと

てもフレンドリーでいつも 'Hi!' と声をかけ合い、また、会えば 'Mariko' と声をかけてくれて、人と人との出会いのおもしろさを痛感しました。特に、韓国や東南アジアの青年たちと仲良くなり、後半はずっと行動を共にして、気がつくと日本人は私だけで、日本語を忘れてしまったくらいに溶け込んでいました。

そして、参加青年の多くが日本との国際交流活動と関係があることがわかりました。たとえば、あるスタッフは「国際青年の村」の参加者、あるジョルダン青年は「日本青年海外派遣」の受入れ担当者、あるシンガポール青年は、友人が今年の「東南アジア青年の船」に参加、ある香港の青年は「静岡県青年の船」受入れで、今年は日本から香港まで同行する、また、あるインドネシア青年はJICAの「21世紀のための友情計画」の参加者で、このフォーラム後、ブルネイでその同窓会に参加する等々。

最後に、今回8月15日に訪韓したこと。これは私にとって、戦争とは、平和とは、そして私たちが今後どのように考え、行動していくかという重要なことを考える機会になったことにとても感謝しています。

▲ 8月15日　開会式場

これまで私は、たくさんの国際交流プログラムに参加する機会を得て、世界各地の青年と交流しましたが、年々、地球は狭くなっていることを実感させられます。私自身が、皆と8日間という時間を共有できたことはとても貴重なことです。我々青年達が、21世紀に向けてグローバルな視野でお互いに協力、協調し合い、世界平和に貢献していくよう、この経験を今後に活かしていきたいと思います。

21か国120人の友達そして81のホストファミリー
—"Up with People"に参加して—

落　合　貴　子
（第5回世界青年の船参加青年）

昨年の7月から1年間、アメリカの国際教育団体「Up with People」に参加し、今年の7月の末に日本に帰って来ました。この「Up with People」に参加するきっかけとなったのは、「第5回世界青年の船」で知り合ったアメリカの友達がこの団体で働いていて、私に話してくれたことでした。

その時、大学3年だった私は、将来小学校の教員になりたいと考えていましたが、「第5回世界青年の船」で本当に多くの人と出会い、母国語、人種、文化や生活習慣が違っていたとしても分かり合えるということに深く感動し、もっと英語も話せるようになりたい、多くの人に出会ってみたい

という気持ちが抑えられずに、大学卒業後、「Up with People」に参加することに決めました。

「Up with People」で私は21か国からの120人の人達と、アメリカをカリフォルニアからフロリダへと横断し、ヨーロッパは北欧、ベルギー、ドイツ、フランス、ポルトガルと回ってきました。

主な活動は3つあります。

第1に、120人みんなで行う世界の国々の踊りや歌。家族の絆や難民問題、エイズの問題などのメッセージを込めたエネルギッシュなミュージカルで多くの人たちに語りかけました。

第2に、奉仕活動として、学校や病院、老人ホーム、刑務所、難民センターなどを訪問し、地域社会の活動や多くの職業について学ぶことができました。私にとって、様々な国の学校を訪問し、子供たちと実際に話ができたことは、貴重な体験になりました。アメリカのサンディエゴの小学校で、メキシコからの移民の子供たちと片言のスペイン語で話し、日本ではお箸を使うと話したところ、お昼の時に小さなストローを2本、お箸の代わりに渡してくれたことは忘れられません。また、スウェーデンの病院でフィジカル・セラピストの仕事を見学した時、鍼を使って治療していたのには驚きました。

第3に、どこに行ってもホストファミリーの家に泊まり、81家族にお世話になりました。ホストファミリーを通して、その国の文化や生活習慣、どんな社会的な問題があるのか、また日本についてどう思っているのかなど、実際にその国の人たちと話ができたのはとても興味深く、また旅行に行くだけでは経験することができないことだったと思います。

最後にこの1年間で一番得られたと思うことは、自分自身に自信が持てるようになったこと、誰に会っても躊躇せずに接することができるようになったこと、英語を使ってどこにでも行ける度胸を持てたこと、以前よりも自分は日本人であることを意識し、日本の文化を大切にしていこうと思っていること、120人の友達そして81のホストファミリーと、小さいながらも世界とつながっていると感じていることです。

これから教員になり、子供たちに私の経験を話すことによって外国への興味、そして国際理解へのきっかけになれたら……それが私の次なる目標です。

▼ アメリカのホストファミリーとクリスマスを過す（筆者、後部左）

▲ ミュージカルの舞台けいこ風景

マレイシア青年受入れ事業

岡山青年国際交流会は、総務庁主催の国際交流事業に参加した者でつくる海外派遣連絡会と県単独派遣者の会（4事業）が一緒になって、昭和57年に発足しました。現在会員約200名、役員15名で各種事業を展開しています。

その中で、大きな事業を紹介すると、第14回となる外国青年受入れ事業があげられます。「岡山県青年の翼」として昭和56年から4年間マレイシアを訪問したことにより、マレイシア青年との交流が始まりました。この友好関係を継続発展させるため、当会が発足した当初から毎年「マレイシア青年クラブ連合」及び「マレイシア連邦土地開発公団」に所属する青年を受け入れています。岡山県の招へい事業ですが、当会が委託を受け、全てのプログラムを企画立案し、会員がそれぞれの地域で独自にその地方の特色のある受入れをしています。

当初マレイシアへの派遣は、ジャライの開拓村で作業を体験する大変厳しいものでした。招へいプログラムも、普段の日本の生活に触れる体験となるようにと、受入れが始まってから4年間は、2か月間県内に滞在し、会員宅にホームステイし、長ければ一週間以上をその家族と過ごしました。北から南へ農作業に合わせて移動するようなプログラムの年もありました。その後も岡山滞在中はほとんどホームステイで、まさに日本の生活に溶け込んだ交流となっています。

マレイシアへの県の派遣は4年間で終了しましたが、その後、当会の派遣事業として3度マレイシアを訪れ、盛大な歓迎を受けました。また、会員で新婚旅行に訪れる者がいたり、招へいマレイシア青年の結婚式に何人もの会員が招かれるなど交流が広がっています。

ここ数年は、岡山県青年の翼で派遣する団員に事前にマレイシア青年を受け入れてもらい、自分たちの派遣に役立ててもらう事前研修の一端ともしています。

この事業により、今までに46名のマレイシア青年が岡山を訪れ、両国の友好理解そしてなによりお互い個々が理解し合う交流となっています。また、この事業に携わった個人の成長、会の活性化に大きく役立ったと確信しています。

今年からは、マレイシア青年に加えインドネシア青年の招へいも予定されており、今後のますますの発展を期待されています。

岡山青年国際交流会
理事　坂手　祥邦

第27回中国ブロック海外派遣青年のつどい

▲ 講演をする劉静さん

各種の青年海外派遣事業に参加した中国5県に在住する青年が一堂に会し、事後活動の情報交換を行うとともに、地域、職場における主体的活動の推進、国際理解及び国際的な協力活動などについての研究討議を行うことを目的として6月10日11日に岡山県の真ん中に位置する吉備高原都市で「第27回中国ブロック海外派遣青年のつどい」が開かれました。

このつどいは、総務庁、岡山県、日本青年国際交流機構をはじめ岡山青年国際交流会、そして地元加茂川町KIOが主催したもので、中国5県から関係者ら約130人が参加しました。

この度のつどいには、国際化を推進する岡山県の特色を紹介する意味から、基調講演を2つ行いました。

そのひとつは、吉備国際大学（社会学部）で学ぶ留学生、リュウ・セイ氏が「中国からみた日本－今、求められるもの」と題して、日本と中国の歴史的背景をもとに、現在を比較し、今後の日本のあるべき姿を論じました。

もうひとつは、加茂川町長による「感動を生む地域づくりと国際貢献」。国際化の根底は、人づくりであり、外へ目を向けることは、内へ目を向けることになると論じました。加茂川町は、日本ではめずらしい国際貢献分野まで踏み込んだ「国際化推進条例」を定め、官民が一体となって地域ぐるみで国際化の推進を図ることで、自らの意識高揚とまちづくりを図っているユニークな町です。

その後、参加者があらかじめ希望した各スタディショップ（分科会）に分かれ、国際交流組織、地域での国際交流、交流イベントの企画、国際貢献などのテーマのもとに各県の具体的な活動事例を発表するなど、研究討議を行いました。

夜のレセプションでは、郷土芸能の披露やゲームなどを通じて、出会いとふれあいの場が生まれ交流の輪が大きく広がったところで、次回の開催地である島根県へバトンを渡しました。

地域社会が、隣人の相互協力のもとに維持されることは、自然の摂理です。国際化によって地域社会の枠は広がり、隣人は広がります。「国際貢献」として構えず、ごく当たり前の行為とする観点が大切ではないでしょうか。こころの時代と言われる今、ひとに、地域に、自然にやさしい……平和へのメッセージを岡山から発信していきます。

岡山青年国際交流会
会長　岸本　久夫

民間援助でラオスに小学校を!

山中　茂
（高知県青年国際交流機構会長
第16回日中青年親善交流参加青年）

民間援助でラオスに小学校を――。昨年8月、私を含め会員7名の「高知ラオス会」という小さなボランティア団体が県内に向けて発した一つのメッセージ。それからちょうど1年。私たちは、ビエンチャン県の二つの村に小学校を建てることができました。

この紙面で、私たちのこの1年の活動について簡単ですが、紹介したいと思います。

▲ラオスの小学校の教室風景

私たちは、昨年5月のラオス訪問のおり、本県出身の駐ラオス和田雅夫特命全権大使をたずねて日本大使館を表敬訪問しました。そこで大使から、日本のラオスに対するODA（政府開発援助）の現状と課題、民間援助の必要性について説明を受けました。そして、席上「ここには救急車が1台もない。ぜひ救急車を寄附してもらえないか」と早速援助の依頼を受けたのでした。

私たちは、日本へ戻る飛行機の中で「大使直々の依頼を断るわけにはいくまい」と話し合い、帰国後すぐに「高知ラオス会」を結成し「ラオスに救急車を送ろう」という活動を始めたのです。

しかし、この活動を始めて約1か月後、ラオスの日本大使館から、ラオスには左ハンドルの車しか持ち込めないので、日本の救急車は使えない、との連絡があり、この話は一時中断になってしまいました。

そんな中、私たちが思案していると、和田大使から手紙で「ユニセフ（国際児童基金）が、1校あたり12万円程度の建設資金を出資して村に小学校を建てているので、この活動に出資協力してみてはどうか。ラオスは貧しい国で教育にまで予算がまわらず、小学校すらない村が山ほどある。」ということを知らされました。そこで、これなら自分たちにもできると思い、活動目標を「小学校建設」へと変更し、活動を再会したのです。

私たちが活動を再開して間もなく、私たちの活動が地元のマスメディアで紹介され、やがて県内各地から私たちのもとにたくさんの支援と募金が届くようになりました。とりわけ、県内のいくつかの小、中、高等学校が、この活動の主旨に賛同し、全校挙げて協力してくれたことは、とても大きな力と励みになりました。

こうして、今年2月末迄に集められた募金の総額は440万円になりました。

私たちは、この活動を始めるにあたり、集めた募金は、すべてラオスのユニセフに渡すつもりでいました。しかし、和田大使から「それだけの募金が集まったのならユニセフに渡すのではなく、直接自分たちで学校を建ててみてはどうか。私た

ちも協力するから」との助言があり、当初の計画を再考してみることにしました。というのも、ユニセフの学校は、トタン葺きの竹壁の校舎で、雨が多いラオスでは2～3年で建て替える必要があり、非効率的なのです。そこで、皆で話し合い練瓦作りで雨にも強い校舎を造ることになったのです。そして、後日それぞれの役割分担のもと、私たち民間の団体と大使館との合同の「友好小学校建設計画」が始まったのです。昨年の11月初めのことでした。

その後も私たちは、学校の文化祭で講演をしたりイベントに出て募金を集めたりしながら、学校建設予定地の調査やラオス政府を交えた3者間での協議を重ね、募金の受け渡しや工事の進み具合を見るために、その都度ラオスを訪ねたりしました。また今年7月には、活動に参加してくれた各学校の生徒22名が、私たちとともにラオスに行き、学校建設現場を訪ね、現地の子供たちや村の人たちとも交流をし、国際協力の意義と重要性を知ってもらう良い機会にも恵まれました。

そして、今年8月10日にポン・グン村に、9月10日にはバンキー村に、みんなの思いがいっぱいに詰まった小学校がついに完成しました。そして、この11月、私たちは授業参観に行ってきます。今から子供たちの笑顔が楽しみです。

皆さんもラオスに行ってみませんか。

私たちがこの活動を始めてから1年。このことは本当に夢の様な話だと思います。しかし、私たちには、まだまだしなければならないことが山ほど残っています。私たちは、この学校で勉強する子供たちのためにも、この活動に協力してくれた人たちのためにも、この2つの学校を、そしてラオスという国を今後も見守り続けたいと思っています。それが社会に対する私たちの責任であり、「国際協力」の在り方だと思います。

▼ ラオス訪問のメンバーとともに（筆者、後列中央）

高知ラオス会

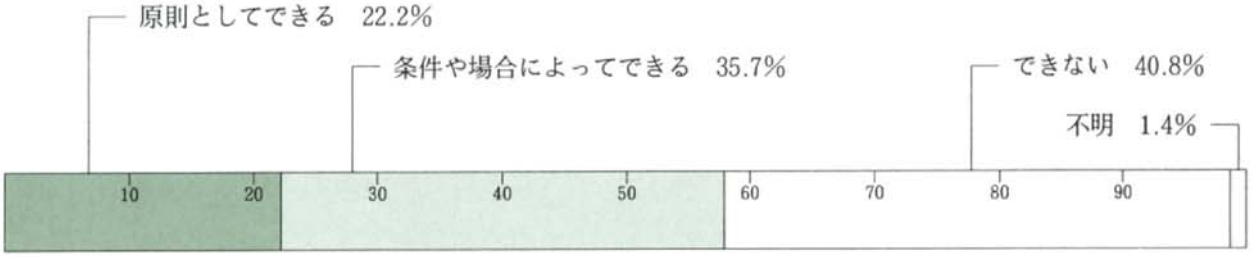
1994年8月1日に結成された民間国際援助団体。JICA（国際協力事業団）の帰国専門家県連絡会会員及び高知県青年国際交流機構会員とで結成されている。現在会員は7名。

主にラオス国の教育や文化、各種専門技術等の向上のための支援活動や交流活動をしている。

事務局　高知市朝倉丁1886－328
倉橋静雄方　☎0888－44－4355
口　座　四国銀行朝倉南支店（普）0183821
高知ラオス会　浜田　康

ホームステイの受入れ「原則としてできる」＝22%

問11　あなたは、日本政府や都道府県、市町村が行う国際交流事業で来日した外国青年をホームステイ（1人か2人の1泊2日程度）させることができますか。



「条件や場合によってできる」という人の条件としては、「土日など休日に限る」「農閑期がよい」など「日取り（曜日、休日）」を挙げた人が62%で最も多く、次いで「日本語の通じる人」「英語でコミュニケーションできること」など「言葉」の問題を挙げた人が40%となっています。（複数回答結果）「休日に英語が通じる人なら可」という人は「原則としてできる」という人とあまり変わらないかもしれません。

「子供と同室」「和室」「シャワーや洋式トイレがない」などを相手が気にしなければできるという人もいますが、これは可能でしょう。

「食事に制限がないこと」「協調性のある人」「自分と同じ趣味の人」といった条件を挙げた人も若干いますが、これは難しいかもしれません。

「したくてもできない」理由としては「家が狭い」のほか、「子供が小さい」「受験期の子がいる」「介護を要する老人がいる」など「家族の事情」が主なものです。

アンケートの最後の「ご意見欄から」

派遣後20年も経って、専業主婦の座に甘んじてしまうと、あの時の感動も薄れがちになり、あらためて国際交流というのも、ついおっくうになってしまいがちです。今は幼い子供たちにいかに国際交流の種をまいてやるかが自分の責任だと思っています。異国でお世話になったお返しをせねばと、ホームステイ先の募集を見るたびに思うのですが、家庭の事情もあり、なかなかできません。でも、いつかは……と思っています。

（福島県40代主婦 K. K.）

海外青年のホームステイ、ホームビジットを受入れたいと思っているが、これまで1度しかチャンスがなかった。今後、受入れをしたい人のために情報を流して欲しい。（栃木県30代塾経営 M. S.）

このページは、平成6年11月にIYEOの全会員を対象に行った「国際交流と事後活動に関するアンケート」（回収率51%）の結果の紹介です。

人物紹介コーナー

今回は、㈶青少年国際交流推進センターの職員を紹介します。

久世総務部長は、穏やかな人柄。若かりしころは早稲田の街を闊歩した文学青年。

交流企画部長の大橋玲子さんは、IYEOの事務局長も兼務して連日のハードスケジュールに少々バテ気味。頑張り屋さんですが、うっかり屋さんでも有名なお姉さん（年齢不詳にしておきます。青年の船第14回）。

総務部の大黒柱は、大渕清子さん。センターに電話を掛けると明るい声で応対してくれます。

ご本人曰く「末っ子のあまえんぼです」とのことですが、いえいえ、しっかり者のお姉さんです。都道府県団体会員の様々な手続き書類を扱っているのも彼女です。

次は、週に2回から3回来てもらっている事業既参加者のスタッフを紹介します。

＊**坂本文子さん**（東南アジア青年の船第10回）。
国際交流活動を愛する活動的な二児のお母さん。東南アジア青年の船受入れ活動歴4年。

＊**樋口直美さん**（東南アジア青年の船第11回）
ご主人の転勤でマレイシアとアメリカに在住経験を持ち、著書に「マレイシア人間事情」他。

＊**椿　景子さん**（世界青年の船第2回）
ご主人の転勤で今年7月までイギリス在住でした。第8回世界青年の船にナショナル・リーダーとして参加します。

＊**大久保晶光君**（東南アジア青年の船第21回）
事業参加中は、デスカッションのリーダーとして活躍。来春はＮＨＫでアナウンサーとしてデビューが決まっています。

総務庁青少年対策本部国際交流振興係

9月にイギリス留学をした角井さんの後任で**赤澤美雪さん**（平成6年国際青年育成交流ジョルダン派遣団員）が、お仕事をしています。今春卒業のフレッシュレディで、仕事への意欲は中々のもの。

お知らせコーナー

注目!

世間ではマルチメディア関連の話題が盛り上がっていますが、この度SSEAYP（「東南アジア青年の船」事業）を説明したW.W.W.（World Wide Web）のホームページがインターネット上に開設されました。このページは、第21回及び22回の東南アジア青年の船の管理官を勤められる総務庁青少年対策本部の林和弘国際交流担当参事官が作成されたもので、全て英語で表示されます。インターネットにアクセスできる方は是非一度のぞいてみてください。また、外国人のご友人にもPRをよろしくお願いします。

SSEAYP Home Page Address: http:// www. bekkoame. or. jp/ upper score - KAZUHIRO

※W.W.W.とは、インターネットを通じてパソコン等を用いグラフィカルなデモンストレーションを行うものです。

■水天宮のオフィス有効活用!?

第8回世界青年の船の関東近郊メンバーによる出発前準備として、「英語のディスカッション講座」が毎週木曜日に人形町の㈶青少年国際交流推進センターで開催されています。

皆さんの国際交流に関する自主的企画のためのオフィス使用の申し出には、出来る限りお応えする方針ですので、ぜひ活用して下さい。当センターの企画でも、7月よりアジアを題材としたセミナーを毎月開催しています。

編集後記

MACROCOSMも第7号を迎え、1周年を迎えることができました。試行錯誤しながらも、皆さんの温かいお便りや助言に支えられて号を重ねてまいりました。これからも皆さんに読んでもらえる情報誌を目指して頑張りますので、お便りや投稿をお待ちしています。　（Y／R／T／H）

＊本誌の年間講読をご希望の方は、㈶青少年国際交流推進センターまで葉書又はＦＡＸにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　11月号　Vol. 7　1995年11月1日発行（隔月発行）

編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103 東京都中央区日本橋人形町2－35－14
TEL　03－3249－0767
FAX　03－3639－2436
e-mail LDP 04056 @niftyserve. or. jp

編集協力：総務庁青少年対策本部
日本青年国際交流機構
定　　価：195円（本体189円）
印 刷 所：株式会社　絢 文 社
TEL　03－3959－3960

身近な題材を活かして楽しい交流を!

◀ お茶摘みツアー

（愛知県青年国際交流機構）

今年で4回目になる、長谷製茶園でのお茶摘み交流。

摘んだお茶の葉は加工して、写真とともに参加者にプレゼント。

ベトナム料理教室 ▶

（静岡県青年国際交流機構）

講師にベトナム人辻村ミーリンさんを迎えて料理教室。真剣な参加者の眼差しをご覧あれ!

◀ 世界の民族衣装ショー

（三重県青年国際交流機構）

昨年になりますが、三重県の「まつり博」会場にて在県海外青年にモデルを努めてもらうなどの協力を得て、世界16か国の民族衣装のファッションショーを開催。交流事業参加の際に訪問国で購入したり、ホームステイ先で贈られた民族衣装を持ち寄って実現したものです。

事業体験を多くの人に伝えよう!

国際交流フェア（埼玉県青年国際交流機構）

総務庁国際交流事業平成6年度参加者による事業報告会を、広く一般からの参加者を得て行いました。スライドや写真を活用し、訪問国の特産物や本なども展示して理解を深めてもらう工夫をしました。新会員の積極的姿勢が生み出した活動です。

総会及び帰国報告会

（鹿児島県青年国際交流機構）

大きな企画ではなくても、事業体験をきちんと語る場を新しい会員に提供することも大切な事後活動です。

他団体との協力で大きなテーマにも挑戦!

ザ・エイズ塾（山梨県青年国際交流機構）

偏見を無くすには、正しい知識を身につけることから始まります。まだまだ日本では、「性」の問題はタブーという風潮が強いですが、多くの他団体と協力してもっと広い視野とソフトな感覚で「性」について考えるというテーマに取り組みました。

「愛する人がエイズだったら、あなたに何ができますか？」

IYEO ロゴマークの意味を知っていますか？

地球の緯線、経線を模り、人が握手している様子を意味しています。世界中が、握手できる日を願って!

IYEO